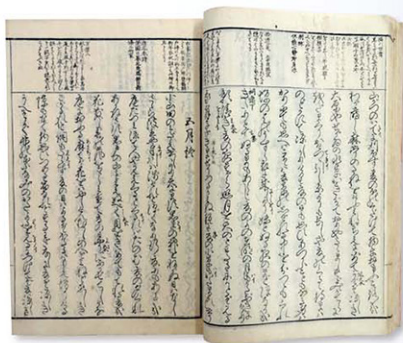
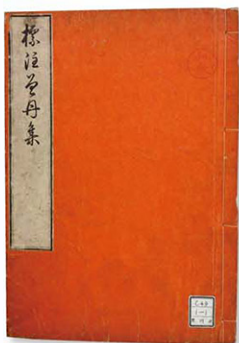


『標注曾丹集』



函架番号C-49。版本1冊。縦25.8cm×横17.9cm。袋綴。53丁。1面10行。楮紙。外題(題簽左肩)「標注曾丹集」表紙右肩「和歌」の朱陽丸印。内題「曾丹集」。第1丁表に「黒川真頼藏書」「黒川真道藏書」の朱陽印。「黒川真頼」の朱陽丸印。曾禰好忠の歌集『曾丹集』に、安田(源)躬弦が標注を付し、源寛光・平由豆流がそれを補訂したもの。毎月集・好忠百首・つらね歌・源順百首和歌で構成される。『標注曾丹集』には、文化十年(1814)と文化十二年と文化十三年があるとされる。そのうちの萬笈堂の英達蔵板による文化十三年版ではあるが、文化十年十月の安田躬弦の校本大意に加えて、文化十二年の藤原正臣の序、植村正路・清水浜臣の文、文化十三年正月の平由豆流の序、源寛光の文化十二年冬の序に

よって、その増補過程を知ることができる点で重要である(ただしこれらの序文には乱丁および落丁あり)。本文は元禄八年(1695)刊の契沖本を底本としていとされるが、加えて、契沖説を参考にしていることが、契沖の『百人一首改観抄』引用によって分かる。他作との影響関係の指摘も多く、『万葉集』『古今集』などに加えて、唐詩からの影響にも言及しているのは、すでに江戸時代から好忠歌と漢詩文の関係が指摘されていたことを理解することができる。ただ『唐詩選』からの引用であろう岑参の句を挙げている点などは時代背景を考えない指摘と言わざるを得ないが、それはまたそれで当時の学問のあり方をも写し出していることになる。

(日本語日本文学科 准教授 小野泰央)